



Title	日本における「演奏批評」の誕生 : 第一高等学校『校友会雑誌』を例として
Author(s)	西澤, 忠志
Citation	文芸学研究. 2019, 22, p. 38-55
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/85185
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日本における「演奏批評」の誕生

——第一高等学校『校友会雑誌』を例として——

西澤 忠志

はじめに

本論文の目的は、日本において西洋音楽が批評の対象として論じられ始めた過程を、明治期の西洋音楽批評が演奏批評であったことに着目し、明らかにすることである。

これまでの明治時代の音楽批評に関する研究では以下のことが指摘されている。日本の音楽批評の歴史をまとめた池田（1980）は、明治時代の音楽の批評を下記のように論じた。当初の音楽批評の書き手は、西洋音楽についての知識がほとんど無く、聴衆の意見を代弁する形で批評をした。しかし明治 30 年代後半から、西洋音楽に関する知識を得た人々によって、音楽用語を使用した技術批評が行われるようになった（池田 1980: 16-17）。但し、日本の音楽史において音楽批評を取り上げる際、その前提として音楽批評は演奏会評と同じ意味で使用されていることに注意が必要である（長木 2010: 471）。この指摘に基づいて池田（1980）を検討すると、音楽批評の例として挙げられているのは、やはり「特定の演奏会の演奏を論じたもの」（白石 2012: 17）である「演奏批評」である。このことから音楽批評の中でも「演奏批評」の展開を整理することが、日本における音楽批評そのものの黎明期の歴史を明らかにする上で適当である。

この「演奏批評」の歴史について白石（2012）は、明治 30、31 年の『読売新聞』を対象に整理し、その特徴を「自ら有する西洋音楽の知識と経験をもとにした音楽観をもって、実際に演奏された音楽自体を批評する」と「批評家という自己認識」としてまとめた（白石 2012: 29）。この研究は日本の「演奏批評」の初期の展開を明らかにしたことに意義がある。しかし、この明治 30、31 年の「演奏批評」が明治 20 年代までの「演奏批評」と比べた際に、どのような独創性を見出せるのかということには触れていない。

したがって本論は、白石（2012）が使用した「演奏批評」という言葉に依拠しつつ、『読売新聞』に先立ち「演奏批評」を行った『音楽雑誌』と第一高等学校（以下、旧制一高と省略）の『校友会雑誌』に着目する。特に、『校友会雑誌』が発行された旧制

一高は、後に「文芸雑誌として始めて音楽批評が掲載された『文学界』」（秋山 1966: 585）に「演奏批評」を掲載した上田敏（1874～1916）や『読売新聞』の「演奏批評」を掲載した榎保三郎（1870～1929）の出身校であることから、それらの原形として『校友会雑誌』の「演奏批評」があったことが推定される。そこで、本論文では旧制一高の『校友会雑誌』に掲載された「演奏批評」を中心に取り上げる。旧制一高は明治 19（1886）年に成立した官立の高等学校で、東京大学教養学部らの前身である。翻訳家・批評家として著名になる前の当時一高生であった上田敏をはじめとした生徒が、『校友会雑誌』で明治 26（1893）年から明治 28（1895）年まで「演奏批評」を行なった。この「演奏批評」については、旧制一高の西洋音楽受容と音楽活動を整理した下道（2008）によって校内の音楽に関する活動の一つとして取り上げられているが、その内実や後年の西洋音楽受容への影響力はいまだ詳らかでない。

以上により、本論文は明治 20 年代の西洋音楽の演奏に関する言説、旧制一高における西洋音楽受容の状況を踏まえた上で、旧制一高で展開された「演奏批評」の読解を行う。その上で、この読解で明らかとなった「演奏批評」の特徴を、それ以前の演奏に関する言説と白石（2012）が述べた『読売新聞』の「演奏批評」の特徴とを比較することにより、旧制一高の「演奏批評」が「演奏批評」全体の展開のどこに位置づけられるのかを論じる。

本論文の構成は以下の通りである。第一節では「演奏批評」が現れるまでの西洋音楽に対する言説を整理し、「演奏批評」が行われ始めた明治 20 年代までの日本人による西洋音楽の演奏に対する見方を提示する。第二節では旧制一高における西洋音楽受容とその反応から、明治 20 年代の旧制一高内での西洋音楽の立ち位置を示す。第三節では『校友会雑誌』に掲載された「演奏批評」の説明と特徴の整理を行う。最後に、『校友会雑誌』に掲載された「演奏批評」の特徴を、当時の音楽言説と日本音楽史の中に位置づける。

なお、明治 19（1886）年から明治 27（1894）年までの旧制一高の名称は第一高等中学校だが、名称の煩雑さを避けるため本論文では第一高等学校（旧制一高）に統一する。

第一節 明治 20 年代の日本における西洋音楽言説

日本において西洋音楽が本格的に受容され始めたのは嘉永 6（1853）年のペリー来航以後である。特に明治時代以降、唱歌教育に代表される国家政策の中で西洋音楽が受容された。こうした唱歌教育を行う教員の育成を目的に設立されたのが音楽取調掛、

後の東京音楽学校である。この東京音楽学校では成果発表を目的として卒業式などの場で演奏会が催された。この他、慈善興業や、鹿鳴館での軍楽隊および音楽団体による演奏が催された。

こうした音楽活動が活発化する中で、既存の出版メディアが演奏会を取り上げ始め、特に教育雑誌や文芸雑誌、新聞、英字新聞が国内の演奏を記事にした。こうした機運の中、明治 23 (1890) 年に、日本で初めての音楽雑誌である『音楽雑誌』が、音楽教育者の四竜訥治 (1859～1928) によって編集、発刊された。この雑誌は東京音楽学校の関係者や軍楽隊の隊員、雅楽寮の伶人からの賛同を得、明治 31 (1898) 年まで刊行した雑誌である。『音楽雑誌』に掲載された主な内容は、唱歌教育に関する議論や俗謡の改良に関する議論など当時の音楽界で問題とされていた事柄であったが、そこで全国各地の演奏会も取り上げられた。

このように国内の出版メディアによって演奏会は報道されたが、明治 20 年代の演奏会報道は音楽の内容を報じるよりも、どのように演奏会の様子を表現するかという、文章の体裁を整えることに苦心していた (中村 2003: 847)。そのため、明治 20 年代の演奏会報道は出版メディアの差異を問わず、演奏会の様子や自身の感想のみを著したものが多く。例えば、全国の一般教師が読者であった『教育時論』の記事では、音楽取調掛の演奏会で演奏された曲目が高尚なものだから「吾等記者のごとき辛ふじて小學唱歌の初歩を解するが如きものにては得て委しく評論せらるべきことにあらず」 (著者不明 1887: 29) とし、演奏については「大に内外人の聴衆を感動せしめたり」 (著者不明 1887: 29) と短く報じている。

以上の音楽をめぐる出版メディアの状況の中、『音楽雑誌』で「演奏批評」が出始める。この『音楽雑誌』に掲載された批評は、英字新聞の「演奏批評」の転載と読者投書の二種類に分けることができる。例えば、「日本で初めての音楽批評」 (馬場 1981: 463) と位置付けられている明治 23 (1890) 年に掲載された「日本東京に於ける東京音楽学校」は、*Japan Weekly Mail* に掲載された記事⁽¹⁾を邦訳した上で転載したものである。また、明治 24 (1893) 年に掲載された「同好會音樂會の批評」は傍聴生による投書である。

この『音楽雑誌』の「演奏批評」には、それぞれの批評の方法や価値基準において連続性は見られないことが以下の例から理解できる。「日本東京に於ける東京音楽学校」では東京音楽学校の生徒による J.S. バッハ《Crucifixus》の演奏について「予想外の好成績を呈したり唯惜しむらくは女子中十分口を開くに乏しき者あるより天賦の美聲を完全に發出せしむるに至らざる」 (テルシャック 1890: 5) と演奏の技術に対す

る批評が見られる。他方で、「同好會音樂會の批評」は「専修生のバイオリンは中々揃へもし精佳くなれどもや音樂學校は女生のみ卒業せしめしにあらざるべし……是技の妙を感じると共に男生のなかり（一人あり）しを遺憾になす……女生徒緒氏の服装なりしが和服の御召じゃ至極結好されど西洋束髪にて和洋混合（否樂器も和洋混交なれど）のおつくりは本邦の優美を損せざるや」（傍聴生 1891: 16）と、演奏者の性別、服装が和洋折衷であったことについて指摘し、演奏については短く触れるのみである。

以上、明治 20 年代における西洋音楽の演奏に関わる言説を追った。この時期の日本における西洋音楽の演奏への言説はほぼ全て演奏に関する詳細な記載は見られない。また「演奏批評」も行われ始めたが、日本人による「演奏批評」では、演奏に対する具体的な指摘はされなかった。

第二節 旧制一高における「演奏批評」の背景

第一項 旧制一高の教育における西洋音楽の受容と学生の自主的音楽活動

旧制一高において、西洋音楽教育が開始されたのは明治 19 (1886) 年からである。この当初の目的は、学科に加えられた歩兵操練で行軍中に生徒が飽きることを防ぐためであった（著者不明 1888b: 3）。そのため、旧制一高は鳥居枕 (1853~1917) を雇い（第一高等中学校 1887: 61）、生徒に《トコトンヤレナ》のような軍歌などを教授した（著者不明 1888b: 3）。しかし、明治 22 (1889) 年に教育が上手くいかなかったことから鳥居は離職し（小出 1964: 71）、代わって鈴木米次郎 (1868~1940) が赴任した。鈴木による唱歌教育の特徴は、旧制一高において外国語の教育が行われていたことから、外国語の曲を取り上げることで生徒に音楽への興味を持たせることを企図し、既存の小学唱歌のみならず外国の国歌や民謡を教材に組み込んだことである（武石 2007: 48）。しかし、明治 24 (1891) 年の学科改正により唱歌の授業が無くなったため、鈴木も辞職することになった。

こうした教育による西洋音楽受容と並行して、明治 21 (1888) 年 3 月 10 日に旧制一高の生徒による唱歌演習会が開催された（著者不明 1888a: 2）。この頃に、旧制一高の生徒による音楽団体である唱歌会が結成されたと考えられる。また、唱歌の授業が無くなった後、唱歌会は明治 25 (1892) 年に生徒同士の互助組織である校友会へ加入し音楽部に改称した。

この音楽部の目的は、同部部長の塩谷栄 (1873~1961) による設立願書によれば、西洋音楽を受容すると同時に日本と西洋の音楽を研究することで日本に合致した音楽を創生し、人々の風教の改善をすることである（著者不明 1892a: 32）。この目的の

下、音楽部は練習や演奏会を行った。しかし、技術指導をしていた島崎赤太郎（1874～1933）が、明治 28（1895）年にドイツ留学のための準備により指導することが難しくなったことで活動が衰え始め（石倉 1935: 26）、明治 29（1896）年の校友会の会議において廃部が決定し、同年 2 月に解散した。

なお、この音楽部以外にも、柔道部が琵琶会を組織し演奏会を開催したように（著者不明 1894a: 78）、運動部の生徒による日本音楽の演奏活動が行われていた。

第二項 旧制一高内の西洋音楽に対する反応

音楽部廃部までの音楽受容の中で、校内の音楽に対する反応は二つの立場に分かれる。一つ目は西洋音楽を、人心を柔弱にするものあるいは婦女子が行うものとして批判する反応である。この例として、明治 25（1892）年『校友会雑誌』第 19 号に大町桂月（1869～1925）が「鏡川漁郎」の雅号を使って寄稿した「本誌第十八號批評」を挙げることができる。この批評は前号に掲載された記事内容を批評したものであり、その中でも上田敏の「美術論」が第 17 号掲載の「天樂⁽²⁾」を暗に攻撃した箇所反論し、琵琶や浄瑠璃の価値を認める一方で唱歌については否定的な意見を著している。

此記事「[天樂]」の意は音楽一般を云ふにあらずして、彼唱歌なるものをいへるなり、此言余は之に賛成す、琵琶歌の悲凌凄愴なる、歌謡の莊重澹冲なる、浄瑠璃の痛切飛躍なる、各其得る所あり、而して唱歌は果たして何の得る所かある。軟柔振はず、人をして唾を思はしむ、オルガンの音殊に馬の尻の如し、幼稚園の童男童女を謡はば、彼のオツペケペーを歌ふに勝るといふまでなり（鏡川 1892: 48）

こうした旧制一高内の唱歌や西洋音楽に対する否定的な意見は鏡川漁郎に限るものではなかった。むしろ、校友会の会議で音楽部の廃部が運動部によってたびたび提起され、結果的に音楽部が廃部になったことから、旧制一高において有力な意見であったと考えられる。

二つ目は、精神衛生に効果があるものとして音楽を受容する反応である。例として、『校友会雑誌』第 4、5 号に掲載された藤浪鑑太郎（1870～1934）「音楽を論ず」を挙げることができる。藤浪は音楽を不要なものとする意見に対し、人の情操を涵養し国家の文明と道徳を奨励するものとしてその価値を認め、逆に都々逸やカッポレを「卑醜」とした上でこうした「邪樂淫聲」を破り、「国風民俗」を美しくする必要性を述べている（藤浪 1891: 12）。音楽が情操面に有効であるというこのような見方は、当時

の日本社会において音楽を擁護する際になされた説明^③と同様のものである。

この対立の背景には、当時の旧制一高において国家主義と武士のエートスが主流であり（竹内 2011: 230）、その上で担い手が誰であるかが問題視されたことが考えられる。例えば、明治 20 年代の旧制一高ではテニスは婦女子がやる遊びとし、逆に野球は男がするものとして位置づけられていた（井原 1905: 241）。そうした位置づけにより、ローンテニス部は「女々しい」という理由で明治 28（1895）年に廃部となっている（竹内 2011: 249）。つまり、特定の担い手がいるという印象と結び付くことにより、各活動の校内での立ち位置が変わったと考えられる。この背景によって、当時婦女子が担い手の中心となっていた音楽が批判された。だが、これは明治期の士族のエリート層の内側に存在していた音楽そのものを卑俗視した（永原 2016: 115）ものではない。唱歌に代表される西洋音楽のみを否定したのである。その証拠こそが、先述した大町桂月が琵琶などの邦楽を擁護したこと、運動部が琵琶会を組織していたことである。

これにより、明治 20 年代の旧制一高内での西洋音楽をめぐる対立は、西洋音楽を批判する従来の武士的なエートスと西洋音楽を擁護する明治以降のエートスとの対立と連動するものであるとみることができる。この対立は後の運動部対文芸部、弁論部という対立軸（竹内 2011: 250）とは異なり、部に関係ない個人の音楽観に基づく対立であった。

第三項 『校友会雑誌』における批評の展開

旧制一高において「演奏批評」が掲載された『校友会雑誌』は明治 23（1890）年に創刊され同校の文芸部によって刊行されてきていた雑誌である。文芸部の前身は明治 19（1886）年頃からの同人雑誌を中心とした文芸活動であり（稲垣 2006: 13）、明治 23（1890）年に校友会が設立されると、文芸活動をしていた生徒が文芸部を組織した。この『校友会雑誌』発刊の背景には、政治的志向を持つ「書生社会」から、印刷物の寄贈交換や匿名で行う相互の論説批判を媒介に非政治的・文学的なコミュニケーションをとる「読書社会」への転換があったとされる（長尾 2016: 69）。

この『校友会雑誌』の読者は在校生、教員、卒業生に限定され、市販されることはなかった（斉藤 2015: 19）。明治 20 年代の『校友会雑誌』に掲載された主な内容は学生や教師による評論、漢詩、紀行文、校内の出来事に関する報道、そして批評である。

『校友会雑誌』に掲載された批評は第 2 号から始まる。それは批評欄の中で行われ、主な批評の対象となったのは前号の内容であった。その目的は「聊か文壇に忠義を盡

さんと思へばなり」(聴雨眼子 1891: 50) としており、同時期に考えられていた批評の意義⁽⁴⁾を参考にすると、相互批判による『校友会雑誌』の質的向上を狙ったと考えられる。この前号の内容に対する批評の他に、他校で発行された『校友会雑誌』、洋書、校内の展覧会、校内の演奏会への批評が行われた。

また、後述する『校友会雑誌』の「演奏批評」に先立ち、『校友会雑誌』では旧制一高内での演奏会が報道された。例えば、音楽部の第一回演奏会では演奏会の日時や場所、来会者、演奏の様子が報じられ、特に演奏に対して筆者が感じた印象が著されている。こうした演奏に対する書き方は、前節で確認した当時の演奏に対する言説のあり方と共通する。この報道の内容の中心となっていたのは演奏以外の部分、つまり、演奏会内で行われた演説の内容や音楽部の活動への提言であった。例えば、音楽部の第二回演奏会を取り上げた記事では、技術に関する批評は「演奏批評」に任せるとし、音楽部に対し「早く偉大敬虔の樂を創成して鄭衛の卑聲を撲滅」(著者不明 1894b: 76) することを求めている。

従って、旧制一高では、教育や自主活動を通じた音楽の受容と、それに対する拒否を示す反応があった。そして、そうした議論を行う場としての『校友会雑誌』があった上で「演奏批評」が行われていたのだと指摘できる。

第三節 旧制一高における「演奏批評」

第一項 『校友会雑誌』における「演奏批評」の展開

『校友会雑誌』で最初に掲載された「演奏批評」は、明治 26 (1896) 年に雅号「春山の霞男」が寄稿した「校友会音楽部第一回演奏會批評」である。この批評の対象となった演奏会は、同年 2 月に開催された音楽部の第一回演奏会である。この演奏会の内容は、音楽部部員だけでなく、高等商業学校と東京音楽学校の生徒、東京音楽学校講師による演奏、音楽部部員の岡田正美 (1871~1923) と東京音楽学校校長の村岡範為馳 (1853~1929) による演説である。

「演奏批評」の構成はその内容によって序文、「演奏批評」、音楽部と旧制一高の生徒への提言の 3 つに分けることができる。最初に、評者が既に『校友会雑誌』で行われていた演奏会報道とはまた違う立場からの批評であること、音楽の妙趣を損なうことなく公平に批評を行うことを表明している。

校友会第一回演奏會の素人評は別項にもあることなれば、余は余の素人評を止めて部員某氏を訪ひてその評を問へり。……左ればあなかちにはいはれされとも、必ず

しも公平適切なる批評を下すことを得るかは斷言し難きなり。特に内部の事にあつかれる予のこと故或は臆分のことあらんも保しがたし、されとも亦幾分か他人の氣のつかさる處にも氣つきしことなきにしもあらざるへし、されは洋樂は洋樂、和樂は和樂、各其特種の妙趣を損せざる様にし且つ勉めて公平に評言をくたしてみん、或は他素人評よりは當れる處も之あらんか（春山の霞男 1893: 33-34）。

以上の序文の後に「演奏批評」へと移る。この「演奏批評」では演奏の編成によって評価する視点が異なるため、曲の編成に分けてまとめる。

まず合唱曲では、歌詞が聞き取れたかどうか、その曲のイメージを表現できたかどうかを評価している。例えば、音楽部による《浮雲》の演奏では具体的な演奏技術よりも、感情表現ができたかどうかを重視して批評をしている。

荒井氏の獨吟實に大出來大出來大出來なりき、唱歌せんとして特に歌ふとは少しも見えず態度實に自由自在にして悲哀の情内に満ちて自から聲にいでたるがごとく特に無意にして一場を睥睨したる實に予の氣に入りて、思はず拍手せんとしたりき。……さるにこれにつき合唱の誠にへたなりしは實に残念至極なりき。三重音なれば歌ふにむつかしきこともありしならん、聞く方にも耳の足らさし處もありしならん、されとも予の一大瑕疵として特に遺憾に感したりしは荒井氏のよく満腔の悲哀の情を實際に歌ひ出たることくなりしに合唱に至りては一向悲哀の情の聞えさしことなりき、言詞の上にては何程に悲しくともその歌ふ調（曲を云ふにあらず）即ち歌ひ風がうはのそらにては一向感し入らぬ者なり（春山の霞男 1893: 37）

次に、器楽曲では演奏技術を中心に評価をしている。例えば、音楽部の大渡忠太郎（1867～1953）と富尾木知佳（1874～1917）によるピアノとオルガンの《箏曲六段調》の演奏に対しては、演奏技術の巧拙を指摘した上で批評をしている。

初の内風琴の方ちとよわくて洋琴のためにまけたりしやう覚えしが別にこれといふことなくよくそろひて一段二段つきぐすゝみたりき、さるに風琴と洋琴と某處にて時のとりかた少しちかひたるより大渡氏ちとめごつきたりしは實に遺憾なり一二音彈せさし様なりしが忽ち勇氣かクソヤケかしらねとも兎に角エーツコイツの勢を以て前進したる處面貌にあらはさゞりし爲め多數の人には或は氣つかさししやもしらねと予には手が内通して正に相分りき（春山の霞男 1893: 35）

以上の「演奏批評」の後には、演奏全体への批評と旧制一高の生徒と音楽部の部員への提言が著されている。演奏全体への批評では、前回行われた唱歌会の第三回演奏会と比較し、器楽の演奏は進歩したが合唱に進歩が見られないことを指摘している。そのみならず、音楽部の合唱による演奏と、来賓の高等商業学校生徒と東京音楽学校生徒の演奏とを比較した見解を述べてもいる。その内容とは、来賓の両校の演奏の方が活発な曲を選曲し演奏したことについて、一高生が音楽の美しさを理解する高尚な段階に至っていないという認識に沿った結果であると同時に、このことは旧制一高の名誉に関わる問題であるとしている（春山の霞男 1893: 40）。そして、この指摘に基づき、一高生に「音楽志操」を養成すること、音楽部の部員へは演奏者個人に合った曲や編成を選ぶことと音の微細な高低を聞き分けられる聴音を鍛えることを提言している（春山の霞男 1893: 40-41）。

この次に掲載された「演奏批評」は明治 27（1894）年に上田敏が雅号「妙幢子」として寄稿した「音楽部演奏會批評」である。批評の対象となった演奏会は同年2月に開催された音楽部の第二回演奏会である。この演奏会でも音楽部部員だけでなく、高等師範学校付属音楽学校⁽⁵⁾の生徒と同校講師による演奏、元良勇次郎（1858～1912）による演説があった。なお、音楽部は、この演奏会を東京音楽学校との競争であり音楽部が運動部と同様に都内で最も優れていることを示すためのものであると位置づけていた（妙幢子 1894: 32）。この位置づけについては、後述する最後の「演奏批評」を解釈するためにも若干の注意を払っておく必要がある。

批評の内容は「演奏批評」のみであるが、音楽に関わる論説は意図的に削られている。その理由は、東京音楽学校卒業式での校長村岡範為の演説⁽⁶⁾と旧制一高校長木下広次（1851～1910）の意見⁽⁷⁾を読んで自身の音楽観との相違を感じたためである。村岡や木下は教育や危機的状況に役立つという面から音楽を評価したが、上田は明治 25（1892）年発表の「美術論」で、音楽を芸術の一つとした上で、音楽などの芸術は現実と「想」との間を取り持つ役割があるものとしていた（上田 1892: 3）。このように、実生活において役立つものとするか、形而上学的に意義を有するものとするかという、音楽に対する見方の違いから、村岡や木下と上田との間で意見の不一致が生じたと考えられる。

以上の序文の次に「演奏批評」に入る。この批評でも曲の編成によって評価する視点が異なるので、合唱曲と器楽曲に分けてまとめる。

合唱曲への批評では曲の来歴を説明し演奏の巧拙を指摘している。例えば、音楽部

の《領布磨嶺》の演奏では、原曲がジルヒャー（Silcher, Friedrich 1789～1860）の《ローレイ》という高尚な作品であること、歌い方は無難だが歌詞が明瞭でなかったこと、ソからミの音へ上がる部分が苦しうに聴こえたことを批評している。

原歌はハイネが絶唱の『ロオレイ』にして譜はジルヘルが簡樸優美なるものなり。鳥居枕氏の作歌を以て奏せしは廿五年十一月廿七日音楽學校學友會に於けるを最初とす。彼は來因の巖頭に坐して夕陽に美音を弄する魔女、此は松浦の濱崎に伏して忍び難き悲恋に泣く貞婦、何れも音楽の『モオチフ』として高尚なるものなり。……兎に角歌ひ様は無難なる方なりしが歌詞の往々明瞭に聴取り難き所ありて而も後段 G より E の『オクタアヴ』に上る邊餘程苦しかりし様に覺えぬ（妙幢子 1894: 30-31）。

器楽の演奏に対しては、感想と表現の有無を指摘している。例えば、來賓として演奏したジェームズ・メーソン（生没年不詳）のデッサウ（Dessaux, Louis Edme ?～1922）《Bucéphale》の演奏について、曲の説明の後に、演奏によってその通りの情景の印象を得たことを称賛している。

曲はデツソウの作 Bucéphale にしてマゲドニヤの青山沃野に跳る駿馬が天稟の雄姿をうつせり。宜なる哉跳るが如く走るが如く活動變幻の思を具へて而も一定の規律全曲を貫通したるは。氏が彈奏の妙實に此曲調跳るが如く走るが如く活動變幻の思を具へて而も一定の規律全曲を貫通したるは。氏が彈奏の妙實に此曲によりて著しく嘶くが如く、趨けるが如きもの琴線の譜音に謳はれて曲の終る迄衆皆陶然として酔へるが如き思ひありき。これ実に島崎氏の彈奏と並びて當日の壯觀と云ふ可し。（妙幢子 1894: 34）

そして、最後には音楽部の活動が盛んになることを祈る旨を著している。

最後に掲載された「演奏批評」は、明治 28（1895）年に雅号「夢幻子」が寄稿した「音楽部臨時祝捷演奏會批評」である。この批評の対象となった演奏会は同年 5 月に開催された音楽部による日清戦争の臨時祝捷演奏会である。

内容の構成は序文、「演奏批評」、音楽部と旧制一高の生徒への提言に分けることができる。また、音楽部と旧制一高の生徒への提言が演奏会の第一部と第二部の間にも挿入されている。

まず序文では、この演奏会の目的が日清戦争における日本の勝利を祝うこと、これから演奏について批評を行うことを著した（夢幻子 1895: 36）。

その後に「演奏批評」が著された。この批評では編成の区別なく、曲の内容や来歴に関する説明をした後に技術の巧拙を中心に批評を行っていた。例えば、音楽部の福井政一（1875～？）によるクーラウ（Kuhlau, Friedrich 1786～1832）《ピアノソナタ第6番》に対する批評では、楽曲の形式や作曲者の説明をしつつ演奏に対し論評した。楽曲の形式や作曲者の説明では、音楽用語や同時代のクーラウへの評価などの専門的な内容を説明している。

本部の「ピアニスト」福井政一君の洋琴獨彈は少年敏腕の横笛家（フルーチスト）の大斗「クーラウ」氏作の「ソナタ」なり。Sonata とは元來舞蹈曲にして多く足拍子をよくするに作りしものなりしが後伊太利人は之を舞蹈ソナタと寺院ソナタとの二部に大別したり。現今の樂説に従へば、専ら洋琴、風琴等の爲に物せられたるものにして通常三部又は四部の律呂調和よりなり。活動沈靜變幻の意を具備し然かも一定の規律は全曲を貫通せるものにして其始は通例は跳るか如き曲にして彼らのガロッツの如き調は此に屬して所謂音樂上 Allegro といふものなり。去れど時には靜調を以て變調律をなす事有り。第二部は前より少しく沈靜なる「ハルモニ」にして婉曲なるもの呼ひて Andante といひ、或は始め沈靜なきとも漸を追うて急速に赴く快暢なるものにして Adagio と稱するもの若くは莊重にして然かも優麗輕快 Adagio より一層迫れる彼の Largo と呼ばるゝもの即ち是なり第三部は Minuet 若くは Trio といふ斷階音を含める幽遠穩和にして熱氣あるもの。時には足拍子取りより樂隊の進行曲に屢々ある如き Scherzando あり。最後の第四部は尤も急速なる格調にして奔馬の逸して跳るか如く驅けるかごとき通常 Adagio と Allegro とを併せたるが如きものよりなる以上の四部が互に相交りて或は急に或は靜かに一高一低の間に八音悉く備はりて耳を傾くれは樂韻聲裡に縹緲として霞の如く霧の如く晴夜の如く朧夜の如く春花の如く冬月の如し。……此クーラウ氏は一千七百八十六年「ウルッエン」に生れ後式部音樂家として「コーペン、ハーゲン」に在り齡四十六にして逝く、當時世人多く其名を知らざりしといへども、多數の優美典雅なる作曲を遺せし爲め、現今にいたり其漸く英名を著はすにいたりたり。福井氏の奏せしは「ソナタ」第六番と銘打ちたる難澁の曲なり（夢幻子 1895: 38-40）。

この楽曲の形式と作曲者の説明の間には、演奏に対する批評が挿入されている。そ

の内容は、難曲にも関わらず少ない練習で面白い演奏を聴くことができたことに対し賛辞を贈りつつ、第3楽章以降が演奏されなかったことが残念であることと、体を労わることを求めるものだった。

福井氏の奏せるものは音調平滑にして「アレグロ」あるも急激に過ぎず。「アダジヲ」をなりとも其規を失わず、譜曲何処にか大度ありて此の如き意味ある難曲にも關せず且つ僅少の練習を以て面白く弾せられ大いに意氣組の入りし様にて流石は黒人連の中に評判の高き學生と名ある丈の腕前なり。惜哉當日「ソナタ」の残り猶二部有りしにも關せず中途にして止められしは、數日前より齒痛なりしが、餘りに力を込められし爲めに忽ち其痛みを増して、是れよりこそ聞き物と待ちわびし「アンダンテ」の所を聞くを得ざりしは大遺憾なりき。……如何に風流の愁に浮身を窺すは美術家の本分とはいへ共、身軀を注意せられん事は余の大に望む所なり（夢幻子 1895: 39-40）。

上記の「演奏批評」の中で一高生に対する提言が、演奏会の第一部と第二部の間に挿入された。その中では、校内で西洋音楽を受容する必要性を述べ、音楽が「婦女子的」なものではないこと、音楽を「婦女子的」あるいは卑しいものであるとする人は音楽の嗜好が無く精神的なことに考えが至っていないこと、音楽部の活動が今日の旧制一高にどのような影響を与えたのかを知ってほしいということが主張された（夢幻子 1895: 41-43）。

「演奏批評」の後にも音楽部と一高生への提言が著され、音楽志操を受容することが高等教育を受ける人にとって必要であるという前提のもと、音楽を嗜む生徒を増やすために音楽部に音楽が優れていることを校内に知らせさせることを促した。それゆえ、そうした音楽部に他の生徒は寛大であって欲しいということをも同時に求めている（夢幻子 1895: 49-51）。また、音楽部に対して前回の演奏会と比較して練習が不十分であったため物足りない演奏が多かったことを指摘した（夢幻子 1895: 51）。

第二項 旧制一高の「演奏批評」の特徴

以上、三つの旧制一高『校友会雑誌』における「演奏批評」のそれぞれの内容を整理した。これを前節で述べた明治20年代の演奏に対する記述と比較すると、旧制一高の批評に共通する特徴として以下の点が挙げられる。

一つ目は演奏された音楽のみを批評の対象とした点である。『音楽雑誌』の「演奏批

評」では演奏の感想とともに服装の改善を指摘したが、『校友会雑誌』の「演奏批評」では演奏以外の点については「予よりも寧ろ部外の人の素人評公平なるへければいいはす」（春山の霞男 1893: 34）として言及していない。また、演奏会中の演説についても言及せず、演奏のみを批評している。

二つ目は音楽用語などを使用し、楽譜に基づいた技術の巧拙を具体的に指摘した点である。『音楽雑誌』などの演奏に対する言説では、演奏について短く感想が著されただけであったが、『校友会雑誌』の「演奏批評」では、「Crescendo」や「オクタヴ」などの音楽用語が用いられている。これは、演奏者に具体的な巧拙を示すためと考えられる。

三つ目は技術の巧拙とともに演奏の表現や「エクスプレッション⁽⁸⁾」の有無を評価した点である。この評価軸は、『校友会雑誌』以前の「演奏批評」では触れられていなかった点である。特に『浮雲』などの合唱曲や《Bucéphale》などの標題音楽においてこの点は重視されている。この演奏の表現の評価の根拠は、楽譜や歌詞の内容といった批評家の西洋音楽の知識である。また、妙幢子すなわち上田は、批評の中で演奏中のミスを無くした上で、情熱によって演奏することが「エクスプレッション」にとって重要であることを指摘している⁽⁹⁾。このことから、技術を基礎にした上で演奏の表現や「エクスプレッション」を評価したことが考えられる。

四つ目は「演奏批評」の著者を素人ではなく批評家として認識していることである。「校友会音楽部第一回演奏會」では序文において、この批評が素人評ではなく専門家による批評であることを著し、「音楽部臨時祝捷演奏會批評」でも「樂界の批評家上田妙幢君（夢幻子 1895: 45）」と前回の「演奏批評」を発表した妙幢子である上田敏を「批評家」として位置づけている。こうした批評において批評家と素人を区別する目的は、当時の批評における批評家の資格に関する論争を参照すると以下のように言える⁽¹⁰⁾。つまり批評家が論じたとすることで、『校友会雑誌』の批評の正当性を保証し、それが決して素人評ではないことを示したいという意図があったことが考えられるのだ。

五つ目は音楽部とそれ以外の旧制一高の生徒に対する啓蒙的な内容を含んでいたことである。音楽部に対しては、それぞれの演奏の具体的な巧拙を指摘し、それとともに今後の活動に対する希望を著している。また、それ以外の旧制一高の生徒に対しては、音楽による精神の向上が見込まれることを根拠に、校内における西洋音楽受容の必要性を著している。こうした啓蒙的な内容が含まれた背景には、前節でみたように旧制一高内における西洋音楽受容に対する反発がある。明治20年代の旧制一高では、唱歌教育や音楽部の活動により西洋音楽が受容された。それに対し、西洋音楽は婦女

子がするもの、あるいは精神を軟弱にさせるものであるという見方から生徒による反発が起こり、音楽部は廃部の危機に直面した。そのため、音楽部を存続させるために西洋音楽を受容する意義を説明する必要性があった。このことから、音楽部の技術向上を目的とした音楽部への「演奏批評」と旧制一高の生徒へ西洋音楽を受容する必要性を説く論説とが同時に掲載されたと考えられる。

考察とまとめ

最後に、ここまで検討してきた『校友会雑誌』における「演奏批評」がその後の「演奏批評」や音楽史にどのような意味を持ったのかを、『読売新聞』の「演奏批評」の特徴との比較により提示する。

『校友会雑誌』における「演奏批評」の特徴である、批評家としての自覚を持った上で西洋音楽の演奏を批評し、西洋音楽に関する知識をもとにして表現ができたかどうかを評価したことは、『読売新聞』に掲載された「演奏批評」との共通点として挙げることができる。この共通する特徴は、『読売新聞』では榊保三郎の「演奏批評」から現れたものである。榊は『校友会雑誌』で「演奏批評」を掲載していた上田と連名で『読売新聞』紙上の「演奏批評」をしており⁽¹¹⁾、なおかつ彼も旧制一高出身である。この複数の要因から、榊が『校友会雑誌』の「演奏批評」を元に『読売新聞』の「演奏批評」を発表したという推測が成り立つ。

以上から、これまで取り上げて来た『校友会雑誌』の「演奏批評」は日本音楽史にとって次の意味が見出せる。つまり、『読売新聞』に先駆けて、読者を啓蒙する目的のもと、批評家の西洋音楽に関する知識を元にした評価基準により、音の美しさや表現といった音楽独自の側面を評価することができた日本で初めての「演奏批評」としての位置づけである。そして、この旧制一高の「演奏批評」は、その後の音楽批評の中心を担う旧制高校や大学出身の知識人による「演奏批評」の先駆でもある。こうした「演奏批評」が『校友会雑誌』で誕生した背景には、明治20年代における「読書社会」の成立を背景に、相互批判の場として『校友会雑誌』が機能したことが考えられる。

また、この『校友会雑誌』の「演奏批評」に現れた「演奏における表現の有無を重視する音楽観」は、日本の音楽史において、唱歌教育における効果などの実用的な側面を重視するそれまでの西洋音楽観から、「精神の力によって音の背後に込められている内容」を聴き取る渡辺（1989）の「集中的聴取」を理想とする西洋音楽観への変化を示すものでもある。こうした日本の西洋音楽観が成立した背景を明らかにすること、そして演奏批評や評論を通じて「集中的聴取」を理想とする音楽観が広まった過程を

明らかにすることが今後の課題となるだろう。

参考文献

- 秋山龍英（編） 1966 『日本の洋楽百年史』 東京：第一法規出版
- 池田逸子 1980 「特集 80 年代の批評をもとめて われわれの批評史を書くために
日本音楽批評史素描」『音楽の世界——音楽家がつくる芸術・社会のための季刊誌』
第 19 巻第 1 号: 16-23
- 稲垣真美 2006 『旧制一高の文学——上田敏・谷崎潤一郎・川端康成・池谷信三郎・
堀辰雄・中島敦・立原道造らの系譜』 東京：国書刊行会
- 奥中康人 2008 『国家と音楽——伊澤修二がめざした日本近代』 東京：春秋社
- 斉藤利彦 2015 「『校友会雑誌』にみる学校文化」 斉藤利彦（編）『学校文化の史的探
究——中等諸学校の『校友会雑誌』を手がかりとして』 15-35 東京：東京大学
出版会
- 下道郁子 2008 「明治 20 年代～40 年代の旧制高等学校の音楽教育——特に第一高等
学校の音楽活動を中心に」『音楽教育史研究——音楽教育史学会研究紀要』 第 11
号: 39-51
- 白石美雪 2012 「演奏批評・楽評と称する批評の形成——1898（明治 31）年『読売
新聞』の音楽批評」 国立音楽大学大学院『音楽研究——大学院研究年報』 第 24
号: 17-32
- 武石みどり（監修），東京音楽大学創立百周年記念誌刊行委員会（編） 2007 『音楽
教育の礎——鈴木米次郎と東洋音楽学校』 東京：春秋社
- 竹内洋 2011 『学歴貴族の栄光と挫折』（講談社学術文庫） 東京：講談社
- 長木誠司 2010 『戦後の音楽——芸術音楽のポリティクスとポエティクス』 東京：作
品社
- 長尾宗典 2016 『＜憧憬＞の明治精神史——高山樗牛・姉崎嘲風の時代』 東京：ペリ
かん社
- 中村洪介 2003 『近代日本洋楽史序説』 東京：東京書籍
- 永原宣 2016 「戦前日本の音楽文化にみるヒエラルキーとデモクラシー」『日本文化
に何をみる？——ポピュラーカルチャーとの対話』 東京：共和国
- 林正子 2004 「近代日本の評論における“批評”の成立——明治期“批評”論の展開と大
西祝「批評論」の意義」『文化的近代を問う』 京都：文理閣

馬場健 1981 「音楽批評」『音楽事典 第1巻』岸辺成雄(編) 459-465 東京:平凡社
矢内賢二 2011 『明治の歌舞伎と出版メディア』東京:ペリカン社
渡辺裕 1989 『聴衆の誕生——ポスト・モダン時代の音楽文化』東京:春秋社

参考史料

石倉小三郎 1935 「回顧三十年」『同声会報』第213号: 24-27
井原外助 1905 「我国野球の幼年時代の思出」木村毅(編) 1962 『明治文化資料叢書 第10巻 スポーツ編』東京:風間書房
上田敏 1892 「美術論」『校友会雑誌』第18号: 1-7 [上田敏全集刊行会(編) 1980 『上田敏全集 第6巻』478-485 東京:教育出版センター]
鏡川漁郎 1892 「本誌第十八號批評」『校友会雑誌』第17号: 44-50 [日本近代文学館(編) 2006 『第一高等学校校友会雑誌』(DVD版近代文学館 8) 東京:八木書店]
小出浩平 1961 「東洋音楽大学創立者 鈴木米次郎先生(1)」音楽之友社『教育音楽 中学版』第8巻第11号: 70-72 (『国立国会図書館デジタルアーカイブ』
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2375693> 最終閲覧 2019年1月8日)
第一高等学校(編) 1887 『第一高等中學校一覽 自明治19年至明治20年』東京:第一高等学校 (『国立国会図書館デジタルアーカイブ』
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1084272> 最終閲覧 2019年1月9日)
聴雨眼子 1891 「一號批評一斑」『校友会雑誌』第2号: 49-51 [日本近代文学館(編) 2006 『第一高等学校校友会雑誌』(DVD版近代文学館 8) 東京:八木書店]
著者不明 「音楽演習會」『教育時論』第81号: 28-29 [開発社(編) 1980 『教育時論 復刻版』第10号 東京:雄松堂書店]
—— 1888a 「新作唱歌」『読売新聞』1888年3月15日号 朝刊: 2 (『ヨミダス歴史館』
<https://database.yomiuri.co.jp/rekishikan/viewerMtsStart.action?objectId=iypNoTWtwDYR24f86vFbn2K2W%2FdXWZbCfM3npTpCxng%3D> 2019年1月9日閲覧)
—— 1888b 「トコトンヤレナの軍歌」『読売新聞』1888年8月19日号 朝刊: 3 (『ヨミダス歴史館』
<https://database.yomiuri.co.jp/rekishikan/viewerMtsStart.action?objectId=8ETBpcka63DrkKbTJSr0SWK2W%2FdXWZbCfM3npTpCxng%3D> 2019年1月9日閲覧)

- 1892a 「音楽部」『校友会雑誌』第 15 号: 30-34 [日本近代文学館(編) 2006 『第一高等学校校友会雑誌』(DVD 版近代文学館 8) 東京: 八木書店]
- 1892b 「天樂」『校友会雑誌』第 17 号: 44 [日本近代文学館(編) 2006 『第一高等学校校友会雑誌』(DVD 版近代文学館 8) 東京: 八木書店]
- 1892c 「學校長理學博士村岡範爲馳氏の演説」『音楽雑誌』第 23 号: 1-2 [複製版 1984 『音楽雑誌』東京: 出版科学総合研究所]
- 1893 「校友会委員總會」『校友会雑誌』第 24 号: 47-48 [日本近代文学館(編) 2006 『第一高等学校校友会雑誌』(DVD 版近代文学館 8) 東京: 八木書店]
- 1894a 「柔道部琵琶會」『校友会雑誌』第 41 号: 78 [日本近代文学館(編) 2006 『第一高等学校校友会雑誌』(DVD 版近代文学館 8) 東京: 八木書店]
- 1894b 「音楽部演奏會」『校友会雑誌』第 35 号: 76 [日本近代文学館(編) 2006 『第一高等学校校友会雑誌』(DVD 版近代文学館 8) 東京: 八木書店]
- 1896 「校友会委員會」『校友会雑誌』第 54 号: 81-83 [日本近代文学館(編) 2006 『第一高等学校校友会雑誌』(DVD 版近代文学館 8) 東京: 八木書店]
- テルシャック, アドルフ 1890 「日本東京に於ける東京音楽學校」『音楽雑誌』第 1 号: 4-8 [復刻版 1984 『音楽雑誌』東京: 出版科学総合研究所]
- 春山の霞男 1893 「校友会音楽部第一回演奏會批評」『校友会雑誌』第 24 号: 33-42 [日本近代文学館(編) 2006 『第一高等学校校友会雑誌』(DVD 版近代文学館 8) 東京: 八木書店]
- 藤浪鑑太郎 1891 「音楽を論ず(承前)」『校友会雑誌』第 5 号: 8-12 [日本近代文学館(編) 2006 『第一高等学校校友会雑誌』(DVD 版近代文学館 8) 東京: 八木書店]
- 傍聴生 1891 「同好會音楽會の批評」『音楽雑誌』第 14 号: 15-16 [復刻版 1984 『音楽雑誌』東京: 出版科学総合研究所]
- 妙幢子 1894 「音楽部演奏會批評」『校友会雑誌』第 35 号: 29-34 [上田敏全集刊行会(編) 1980 『上田敏全集 第 6 卷』530-535 東京: 教育出版センター]
- 夢幻子 1895 「音楽部臨時祝捷演奏會批評」『校友会雑誌』第 48 号: 36-52 [日本近代文学館(編) 2006 『第一高等学校校友会雑誌』(DVD 版近代文学館 8) 東京: 八木書店]

註

- (1) A. Terschak, "THE IMPERIAL SCHOOL OF MUSIC IN TOKYO," *Japan Weekly Mail*, June 28, 1890.
- (2) 「人工細工の音楽、殊に西洋丸呑みの俗楽に狂するの徒、試に枯聲を張り上げて呻り、以て彼の天外鶴鵲の聲を孰れか趣味多きやを比べて、飄然自から悟る所あるべし」(著者不明 1892b: 44) と西洋音楽を俗楽と見なしている。
- (3) 特に東京音楽学校の存廃論争の際に出された音楽学校存続派の主張は、音楽は徳育や風教に資することを根拠に論を展開していた(奥中 2008: 212)。
- (4) 明治 20 年代には、良書と悪書の選別といった批評の効用が説かれた(林 2004: 35-36)。
- (5) 東京音楽学校は明治 26 (1893) 年 6 月から明治 32 (1899) 年まで高等師範学校附属音楽学校となった。
- (6) 明治 25 (1892) 年 7 月 9 日に行われた東京音楽学校卒業式における演説のこと。その中で村岡は「人の最も嗜好する所の音楽なるものは教育上風教上實に著大なる勢力を有するものなり」(著者不明 1892c: 2) として、音楽は教育や社会の教化において有効なものであるとしている。
- (7) 校友会の会議で音楽部の廃止が運動部から提起された際に、木下は「國家多難の日に非ずんば、絶妙の音楽は出来ず。さりとて平素此道を極めされば、常時口を衝て出つべき理なし。されば、今日より此道を究むるは終に欠くべからざるなり」(著者不明 1893: 47-48) として音楽部を擁護している。
- (8) 『校友会雑誌』の「演奏批評」によって「Expression」や「エキスプレッション」と表記が異なるが、ここでは「エキスプレッション」と表記を統一する。
- (9) 「凡そ樂人は先づ冷淡なる樂譜をたどりて一點の差違なき保し其れより一步進めて満腔の情熱を指頭に托さざる可からず。樂に尚ぶ所は實に此神來の情熱にして『エキスプレッション』の妙機茲に存す(妙幢子 1894: 31)」
- (10) 例えば、劇評において素人評と見巧者による評判記が対立したように、明治 20 年代は批評家が「黒人」であるか素人であるかが問題とされた(矢内 2011: 34)。
- (11) うへだ、さかき(上田敏、榎保三郎)「同聲會演奏批評」『読売新聞』1896 年 11 月 11 日、12 日、第 1 面